暑い夏
南部を燃やす
熱き者ども、
赤い炎
15万人を魅了した
1万発の花火
それが　8月15日

火祭りの由来

夏の夜を赤々と炎で染める奇祭「南部の火祭り」は、神を招き祖霊を呼ぶ目印とした民間信仰の一種で、小正月のドンド焼等もこれに類するようです。

それが、仏教の「盂蘭盆会（うらぼんえ）」と習合して、毎年8月16日の「送り火」「川施餓鬼（かわせがき）」として行われ、さらに稲作を病害虫から守る「虫送り」としても伝えられました。

このような祭りは、富士川流域の各地で行われていた行事で、起源は定かではなく、舟運がさかんとなった江戸中期の元禄時代頃からだといわれています。

今もなお伝統行事として伝承される「南部の火祭り」は、町をあげての大イベントとして8月15日に定着して行われています。

当日は、「投松明」「灯籠流し」「大松明」「百八たい」からなる幻想的なお祭りに、1万発の花火が華を添え、壮大な火の饗宴は夏の風物詩として見る人の心に静かにしみわたっていきます。

'95版ギネスブック（世界記録事典）の日本の記録として「日本最大の火祭り 南部の火祭り」として紹介されるほどです。

盂蘭盆会：家に帰ってきた霊魂をもてなす。お盆。

川施餓鬼：川で溺れた人の霊を供養したり、川でとれた魚介類の霊を祭るもの。